

ものごとには常に

表と裏がある



秋津 ミチ子さん

大阪府出身

脚本・映像プロデューサー

1994年 高畠町へ移住

農的暮らしに浸っている

大阪で映像関係の仕事を手がけ、自然や農業のレポートなども多く制作していました。自然も農業も、あるピーク毎の旨い部分にしか触れていないことに気づき、本質を知るためにはそこ（自然の中）に住むことが必要であると感じ、移住を決意しました。もともと山が好きで、ブナの木が好きだったので、生き物が豊かでブナの占有率が高い、飯豊・朝日連峰のある山形を移住先として選びました。

季節のめぐりごとに変わる自然の営みを丸ごと感じ暮らしていく中で、まずは自分の営みとして田畑を耕すことを考え、高畠町の「まほろばの里農学校」に参加しました。農業がしたいというより、「農的暮らし」を求めての参加でした。その後1994年5月に大阪から高畠町に引っ越しました。

高畠町の“人”に惚れ込んでの決断でした。高畠町は30年以上前から有機農産物や農的生き方を伝えることを通じて、都会との交流が続けてきた場所です。農繁期にはたくさんの人がやってきて農作業に汗を流します。そんな体験を経てたくさんの都会生活者が高畠に移り住んでいます。高畠の人は都会からきた人をシロウトとバカにしたりせず、根気よく付きあってくれます。知る値打ちのあることを知っており、何より自分たちの暮らしに誇りを持っているから伝えようとするのです。そんな彼らのパワーに引き込まれたのです。

高畠に住んで13年目になります。ようやくリアリティーをもって自然を感じることができるようになった気がします。畑にしばしば訪れるカモシカを、

同じ自然の中で共に生きる仲間として受け入れることも、来たばかりの頃にはできなかったことです。

高畠に着いた二日後から耕し始めた畑も、今では4反分(40a)にまで広げ、豆類だけでも20種類、他にもたくさんの野菜と3反分の田んぼからはお米を収穫しています。自給自足をしています。自分で作って穫れるのは当たり前とっていて、「(自生した)山の恵みだけで生きていく」という見果てぬ夢を追いかけているところです。夢に向かって、“山を見極める目”を養うため、山に入るのが今一番の楽しみです。

住みよい季節や収穫時期などのピークを経験しただけでは、その地のことはわかりません。厳しい季節もあれば収穫に向けコツコツ行う農作業の日々もあります。ものごとには常に表と裏があることを忘れてはいけません。そして、厳しい季節やコツコツ作業をする日があるからこそ、自然の本当の美しさを感じ、収穫の喜びも大きいものとなることは間違いありません。表と裏両面全てを受け入れなければ見えないものがたくさんあるはず。これから山形暮らしを考えると“エエとこ取り”でなく両面の経験をおすすめします。きっと新たな発見があるのではないのでしょうか。



愛犬ゴンちゃんと自力で建てたワラ小屋の前で